

■研究ノート■

国分寺市の畠山重忠伝承と無量山道成寺

—恋ヶ窪の地域説話をめぐって—

依田 亮一

はじめに

「姿見の池は、かつて付近の湧水や恋ヶ窪用水が流れ込み、清水を湛えていました。その名の由来は、鎌倉時代、恋ヶ窪が鎌倉街道の宿場町であった頃、遊女達が朝な夕なに自らの姿を映して見ていたという言い伝えによります。また、この池は「一葉松」の伝承の中にも登場します。源平争乱の頃、遊女の夙妻太夫と坂東武者で名将といわれた畠山重忠とが恋に落ちました。ところが、太夫に熱をあげるもう一人の男がいて、その男は重忠が平家との西国の戦で討ち死にしたと嘘をつき、あきらめさせようとしたが、深く悲しんだ太夫は姿見の池に身を投げてしまったと言い伝えられています」

これは昭和四十年代に一度埋没し、その後、平成十一年に再生整備した姿見の池緑地（西恋ヶ窪一丁目）の案内板に記された「恋ヶ窪」の地名発祥に関わる地域説話

である。メルヘンな気分をそえられる恋ヶ窪の地名は、ほかにも国府付近の窪地「国府が窪」の訛りという説や（吉田一九〇七・高橋一九三〇）、崖を意味するアイヌ語の峽「カイ」が「コイ」に訛って「恋」の字が宛てられ、後世に恋愛伝承が付加されたとする説（菊池一九六四・菊池二〇一四）、さらには年紀不詳『国分寺村古絵図』に「鯉ヶ窪」の表記があることから、水の豊富な土地で池に鯉がいたことに因むという説（関口一九七五）※一など、さまざまに語呂合わせ的な解釈が与えられている。

いうまでもなく、説話に登場する畠山重忠とは武蔵国男衾郡畠山郷（埼玉県深谷市）を本貫地とする武将で、治承四年（一一八〇）に平家追討を目指す源頼朝が伊豆で挙兵した際は敵方に与したが、後に臣従し、治承・寿永の乱での活躍を経て、鎌倉幕府草創期の有力御家人となった人物である。そして頼朝の没後は執権北条時政に

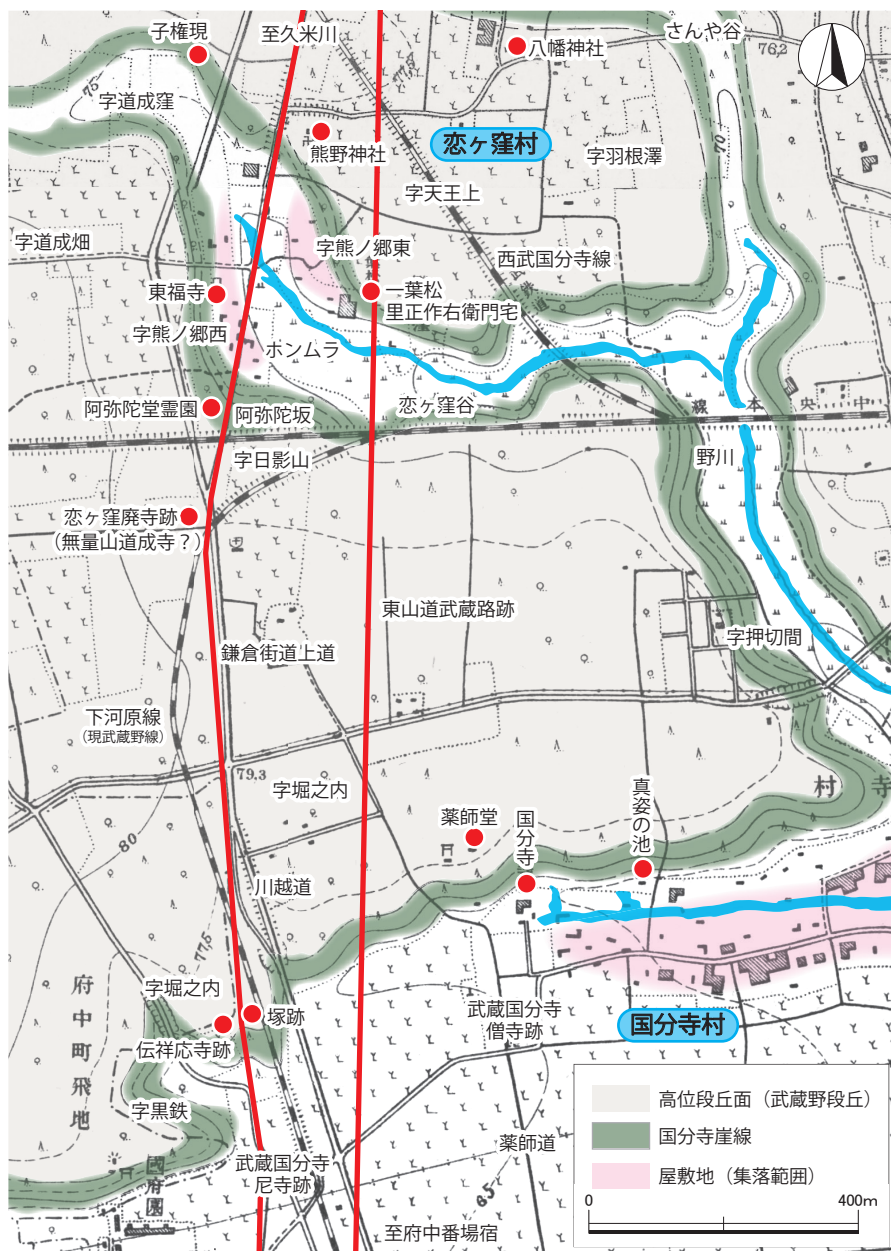
謀反の嫌疑をかけられ、元久二年（一二〇五）六月に都筑郡二俣川（神奈川県横浜市区）で一族ともに滅亡したが、存命中から武勇の誉れ高く、その清廉潔白な人柄から「坂東武士の鑑」とも称されている（清水二〇一八ほか）。

さて、この説話は『国分寺市史上巻』（以下、市史上巻と略す）の「第五章 中世における国分寺市域」で、柴辻俊夫氏が「第一節 鎌倉幕府の成立と武蔵」に「畠山重忠の伝承」を立項し、「いつ頃成立した伝承かはつきりしない」としながら「少なくとも江戸時代の中期には成立していた」と簡潔な紹介に留めているが（柴辻一九八六）、説話がどのような過程で形成され今日に伝えたのか、小稿では時系列を追って関連資料を提示しながら、遊女達が自らの姿を写した「姿見の池」や重忠と「夙妻太夫」の悲恋に因む「松」とは何であるのか、その後の研究や旧版市史刊行後に行われた発掘調査成果を踏まえながら再検討してみたい。
※一

一．地域の地勢と中世の恋ヶ窪

まず、近世・近代における恋ヶ窪地区の景観を踏まえ

ておこう。現在の国分寺市域は明治二三年（一八八九）に江戸時代の十箇村が合併して形成された。古多摩川が浸食した国分寺崖線沿いで、野川の源流域を含む国分寺村と恋ヶ窪村は中世以来の古村であるのに対し、村内に湧水地を取り込まない市域北部の八箇村は、玉川上水道水後まもなく享保年間（一七一六～三五）に開拓された新田村である。このうち恋ヶ窪村は現在の大字西恋ヶ窪・東恋ヶ窪一帯に該当し、高位の武蔵野段丘を開析する二つの小支谷（通称、恋ヶ窪谷・さんや谷と呼称）が入り組む、起伏の多い複雑な地形を呈している（図一）。近世の集落すなわち屋敷地は、東福寺付近の恋ヶ窪谷筋に広がる「ホンムラ」（小字熊ノ郷東・熊ノ郷西）を中心に、図一の範囲からは外れるが、現日立中央研究所の北側で延宝年間（一六七三～八〇）に開拓された古新田の「サンヤ」（小字山谷）、現孫の湯通り沿いで享保期に拓けたホンムラの持添新田である「シンデン」（小字本村附）の大きく三箇所に分かれる。ホンムラは水田を保有するものの、『新編武蔵風土記稿』に「陸田が多くして水田少し」とあるように村域は畑地と山林が卓越する景観で、また「家数凡二四軒、其内十七人古き百姓のよし



図一 近世恋ヶ窪村・国分寺村の旧景観と阿弥陀坂・無量山道成寺推定地

(昭和28年3月東京都建設局調製 1/3,000 地形図「国分寺」「国分寺北」を張り合わせし、彩色・加筆)

にて、検地の時毎戸屋敷地を免除せられ、併せて是が為に二段九歩の敷を除せらる」ことから、古来村に人々が定着した様子が窺える。

しかし、恋ヶ窪村に関する中世史料は極めて少ない。まず、鎌倉極楽寺の僧明空が流行宴曲を集めた歌謡集で、正安三年（一三〇一）頃の成立とされる『宴曲抄』に「善光寺修行」と題する鎌倉街道上道沿いの各所を詠んだ作品があり、その一つに恋ヶ窪が登場する。「……小山田の里にきにけらし。過こし方をへたつれば。霞の関と今ぞしる。おもひきや我につれなき人をこひ。かく程袖をぬらすべしとは。久米川の逢瀬をたどる苦しさ。武蔵野は限りもしらずはてもなし……」（塙保己一編 一九二五『続群書類従 第十九輯下 遊戯部・飲食部』平文社より）。「こいがくぼ」地名の初見資料でもある。

続いて、京都聖護院門跡の道興准后が文明一八年（一四八六）に京都を発ち、翌年三月まで北陸へ関東へ東北を巡った紀行文『廻國雜記』に「……此関をこえ過て恋が窪といへる所にて。朽ち果てぬ 名のみ残り 恋がくほ今はたとうも 契りならずや ある人のもとにまかりてあそび侍りけるに。題を探て三十首歌よみ侍りけるに。深夜寒月。春秋にあかしなれぬる 心さし 深き霜夜の 月そしるらん 松雪夕深。

嵐さへ うつもれはてて 降る雪に 松のしるへも なき夕かな 思ふ戀言。さすか又 かくとはいえこそ 岩こすり 下に乱て わふとしらなん……」（塙保己一編 同書より）とある。十四〜五世紀の街道沿いに拓けた宿駅の一つ「恋が窪」は鎌倉武士らが善光寺参りする通過点で、室町時代に「恋」をモチーフに歌詠みが行われ、その象徴として「松」が暗示されていることに、ひとまず注目を払っておきたい。

なお、村内の古刹武野山東福寺（真言宗豊山派）は、本寺の府中妙光院が所蔵する元文四年（一七三九）の『門末代記』に歴代住職の名がみられ、開山は未分明ながら享禄元年（一五二八）の中興と記されているほか、同院所蔵『本覚列祖伝』で貞観元年（八五九）に妙光院が開山後、四百年を経て住職が隠居するために東福寺を建立したことを伝えるので、十三世紀半ばに開山された可能性はある（藤森他一九九五）。※三

二・近世地誌・紀行文にみる重忠伝承の形成

さて、柴辻氏が江戸時代中期には成立していたという重忠伝承は、現在、府中本町駅近くに佇む天台宗寺院の善明寺に祀られ、建長五年（一二五三）の年紀と造像関

係者名を陽刻した鉄造阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）とも深く関わっている。^{※四} 鉄仏は江戸時代後期に

は六所宮（大國魂神社）参道脇の鉄仏堂に祀られていたが、明治維新の神仏分離に伴い現在地へ移され、さらに古くは恋ヶ窪村もしくは国分寺村に所在したという由緒を持つている。本仏像の来歴を伝承に絡めて考察した小野一之氏の研究によれば、六所宮神主家に「享保の頃、国分寺村の黒鉄谷戸で発掘された」と伝承される鉄仏は、しばらく露座となっていた時期を経て、寛政七年（一七九五）の紀行文『武蔵野草』に鉄仏堂の存在があることから、天明期（一七八一―八九）までに六所宮へ移されたもので、元々は武蔵国分僧寺か尼寺、またはその関連堂舎に所在し、そこに恋ヶ窪の重忠伝説がすり込まれることになったという数奇な来歴を推測している（小野二〇一一）。以下、小野氏の先行研究に学びつつ、恋ヶ窪地区にフォーカスして重忠伝承の形成過程をみていきたい。^{※五}

まず、田澤義章が享保二一年（一七三六）に著した『武蔵野地名考』の「恋ヶ窪」項に次のような記述がある。「古へ京師よりみちのくに至るの往復の地なり、此駅に遊女などあり

し也、今は武蔵の中の家となり、恋がくぼ村なむ云、藤原の孝標女さらしなの日記に、遊びともきたりてなどかける、此ところなるべし、さらしなの日記事ながければ、こゝにもらしつ」。恋ヶ窪村は古くから往還の要地で、かつては遊女がいたことを伝える。そして平安時代の中頃に菅原孝標女が自身の回想録として著した『更級日記』をとりあげ、上総国司の任期を終えて帰京する父孝標に従って恋ヶ窪を訪れたとしているが、同日記中に恋ヶ窪の記述は存在しない。

続いて、寛政六年（一七九四）に古川古松軒著『四神地名録』『恋ヶ窪村』の項を掲げる。「村名珍しき称号也。初にいふことく古しへの古道にて、むかしは傾城数多有りてはんじやふの所にて、畠山重忠に愛せられし遊君自殺し、死せししるしの松有り。土人傾城が松と称す。いかにも年ふりし老樹にて、逆枝をうちて風ぞくよき松也。阿弥陀坂といふ所に草ぶきの阿弥陀堂有り。重忠彼傾城菩薩の為に、府中に今有る阿弥陀仏を安置せし旧地といふ也。うたがうふへきもなき実跡と思はれて、むかしを思ふ情ありし也。松のありし地に、古しへは無量山道成寺と号せし寺院の有りしよし。云ひ伝へのみにて今はなし。うつりかわるは世の流行にして、今は至而淋しき僻地也。恋が窪の地よりは古墓をほり出せし事ながら、いまいまとやらん土人いふて、本

の地中へほり埋しとの事也。けふも往來の傍らに応永年中の古墓有りしなり。今年まで凡四百余年なる年号也。珍しといふべし。ここで畠山重忠と遊女の悲恋説話が現れ、物語の象徴として「松（傾城の松）」の存在を強調する。また、今は府中六所宮にある阿弥陀仏は、重忠が遊女の菩提を弔うために造立し、元々は阿弥陀坂の阿弥陀堂に祀っていたもので、すでに廃寺となっていた道成寺の近くには傾城の松があつたことを伝えている。さらに地中から古墓が発見され、路傍に応永期の板碑が造立されていた様子も窺い知れる。

恋ヶ窪は、狂詩・狂歌・洒落本作者で著名な大田南畝の先祖所縁の地でもあつた。文化六年（一八〇九）の『調布日記』には恋ヶ窪村を訪ねた旅行記がある。「……これよりうしろの松の林をわけゆきて、川越の道にいでて恋が窪村にいたらんとす、此村は、予が先祖大田の名字のある所なれば、一しほなつかしくゆきゆきて道の左に榜示あり、もとの御代官早川八郎左衛門支配所、恋が窪村とあり、左の小高き所に寺あり、武蔵山東福寺といふ真言宗門のさし入に石の地藏尊むかひたてり、石坂をのぼりみれば宝篋印塔石あり、側に彼岸さくらを三四株うえ置たるが花ややひらけり、此所に石碑をたてて先祖の事をも記

しをかましと思ふもあらましごとくなるべし、右の小道に入りて小流をわたり、此村の里正某が家にいこふ、此家のうしろに牛頭天王の小祠あり、神木の松一葉の松なり、一むら竹のしげりたる中にくぼかなる所あり、これ古への北国街道なりとあるじいへり、傾城か松みんとて立ていでゆく、畑は瓜畑なりといふ、ゆきゆきて八幡の小社あり、傾城か松は大きな松なり、かたはらにも二本ばかり、それよりすこしちいさき木あり、畠山重忠の愛妓のしるしの松なりと云、又立歸る道の右に道場畑といふ所あり、又右の方に阿弥陀坂といふあり、この小高き所に草ぬきの阿弥陀堂あり、府中六社にある所の阿弥陀仏は此所にありしと云、四神地名録に松のありし地に、右は無量山道城寺と号せし寺院のありしよしをいへど左にてはあるまじ、此道場畑といへる所にありしなるべしと思はる、此阿弥陀堂も其境内にてありしなるべし、今は無住なり、青石の碑ありしが年号みえず、此地より古墓をほり出せし事ながら、いまいましとやらん土人いひてもとの地中へほり埋しとの事……なりと、地名録に見えたるもわか遠つおやの墓などもありしならんとしのべし……。名主家の屋敷には牛頭天王の祠と神木の「一葉の松」、そして竹藪の中に切通し状の古道跡（古代の東山道武蔵路跡）があり、「一葉の松」とは別に重忠縁の大樹「傾城の松」が八幡小社の脇に立

つ。その帰路では阿弥陀坂の草葺堂へ立ち寄り、松が立つ坂の上は無量山道成寺の跡地で、路傍に年紀不明の石碑がある光景を記録している。

同じく、十九世紀前半の地誌類を幾つかみておこう。

まず、文政六年（一八一三）の植田孟縉撰『武蔵名勝図会』は国分寺村に「姿見之池」の項を掲げ、「国分寺より僅かに東の方、村居の内にある小池なり。中に島ありて、弁財天の小祠あり。鳥居は村内往来道の端にあり。ここより池まで廿間程あり。この池を名付けて、小野小町姿見之池と号す。往古小町武蔵国まで来たりし頃は盛かりも過ぎければ、日毎に姿を水鏡にうつし見て、面影の変じけるをなげきけると云。弁財天は小町が精を祀るとぞ。西勝院に寺伝の説あり」と記し、現在の西元町地区に所在する「真姿の池湧水群」（東京都指定名勝）を「姿見の池」だとして紹介している。また、恋ヶ窪村は「往古の官道にて、府中へ出る駅次なり。いまは府中領と号し、府中より川越へ行く道なり。村の中程より少し南の方に当たたりて、往昔の駅舎の跡とて古瓦など多く畠中より掘りだすことあり。又云鎌倉の繁昌なるときは、ここに遊女町ありしと云。それゆえ、傾城松などと号するもあり」と概観し、『廻国雑記』に触れつつ次に掲げる名所旧跡を紹介する。

傾成松 久米川へ行く道の八幡窪とて、村鎮守八幡宮の傍らにあり。囲り一丈二尺許。又云この松は傾城町の界の松なりしと云。

一葉松 囲り五尺許。往古の親木は枯れて、根株二ツあり。右同村の村長の屋敷内にあり。古街道の傍なり。

古街道 道幅五、六間、府中より久米川道なり。右同村にあり。いまは村長が屋敷内にその跡あり。

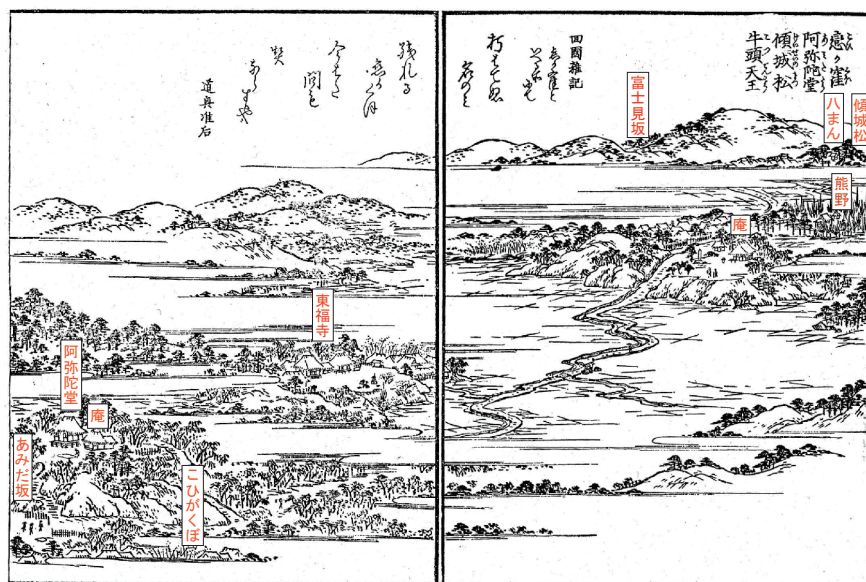
涎塚 右同村にあり。川越道の傍にして、国分寺村界なり。高さ七尺程。塚の謂われ不知。塚上に板石の古碑あり「応永九年

（二四〇二）壬午八月十五日、了圭禪尼」

傾城松と一葉松という二本の大樹が村のランドマークで、国分寺村境に応永九年の板碑と高さ二メートルほどの塚（涎塚）があり、古瓦が出土することを記している。

また、文政十一年（一八二八）の『新編武蔵風土記稿』の恋ヶ窪村の項では、八幡宮・彌陀堂・阿弥陀坂・恋ヶ窪・傾城が松を名所として紹介し、八幡宮脇の傾城の松を重忠と結びつける伝承は俗説であることや、高安寺の末寺である彌陀堂は、以前は無量山道成寺もしくは飯寺と号していた様子を伝える（注八参照）。

さらに、天保五年（一八三四）の『江戸名所図会』の恋ヶ窪村の項でも、長谷川雪旦の挿絵に『廻国雑記』の



図二 『江戸名所図絵』恋ヶ窪・阿弥陀堂・傾成松・牛頭天王の挿絵（一部、文字を加筆）

道興准后の歌を添えて阿弥陀堂・傾成松・牛頭天王を名所として掲げ（図二）、阿弥陀坂について次のように記している。

阿弥陀坂 富士見塚より十三町あまりを隔てて、恋が窪村の地北へ向ひて下る坂を云ふ。この坂の左に傍ひたる岡に草案あり。土人阿弥陀堂と称す。木造の阿弥陀如来を本尊とす。延享四年鶴心と云ふ僧、この草庵の廃れたるを興す。土人云ふ、古への本尊は銅像にして、今府中六所宮の社地にあるものこれなりと。相伝ふ往古畠山庄司次郎重忠、この地恋が窪の駅舎にやどりし頃、寵愛せし遊君ありしが、重忠平家追討につきて西国へ出陣せらる。然るにその後、をこのものありて、重忠討死したる由いつはすかしたりしを実とし、かの遊君歎きのあまり終に自殺したりしを、後重忠聞きてあはれみ、かの遊君が節操を感じ、菩提の為にこの阿弥陀堂を建立し、鍔を以て弥陀如来の像を鑄て安置せしといふ。因みに云ふ、この地に道場畑と字する地あり。土人云ふ、むかしこの地に無量山道成寺と号する寺院ありし故に、しか唱ふるとぞ。しかるときは、この阿弥陀堂もその境内にありしものなるべき歟。又云ふ、今府中六所宮の社地にある所の、鍔像の弥陀仏は、重忠愛せし遊君の菩提の為造立する所の仏体なりといへども、その仏像の銘文年号等を考ふれば、重忠とは時世大いに違ひ、誤りなる

事明らかし。猶、六所の宮の条下をみるべし。

悲恋説話では遊女に横恋慕する別の男が登場し、男の虚言により遊女が自害する件が付加されている。また、阿弥陀堂の旧本尊は六所宮の鉄仏で、重忠が亡き遊女の菩提を弔うために造立したと流布されていたが、仏像の年号銘は重忠の生存年ではなく、伝承が誤りであることを指摘している。

これらの各種地誌・紀行文から、街道沿いの恋ヶ窪に嘗て遊女が集う宿場町があり、遊女と重忠の恋に纏わる説話の象徴として松や、六所宮の阿弥陀仏に因んで阿弥陀坂・阿弥陀堂の旧跡が観光名所として喧伝された様子がわかる。また、傾城松とは別に名主家の屋敷地にも一葉松と呼ばれる大樹があり、往来する人々にとつて恋ヶ窪は松を目印とする景勝地でもあった。ただし、遊女が自身の姿を映したという「姿見の池」や「夙妻太夫」は、この時期の資料には見られない。

※六

三、恋ヶ窪廃寺跡と無量山道成寺

近世中々後期の地誌・紀行文で各地の名所旧跡が注目されると、武蔵国分寺は大正十一年（一九二二）に国の

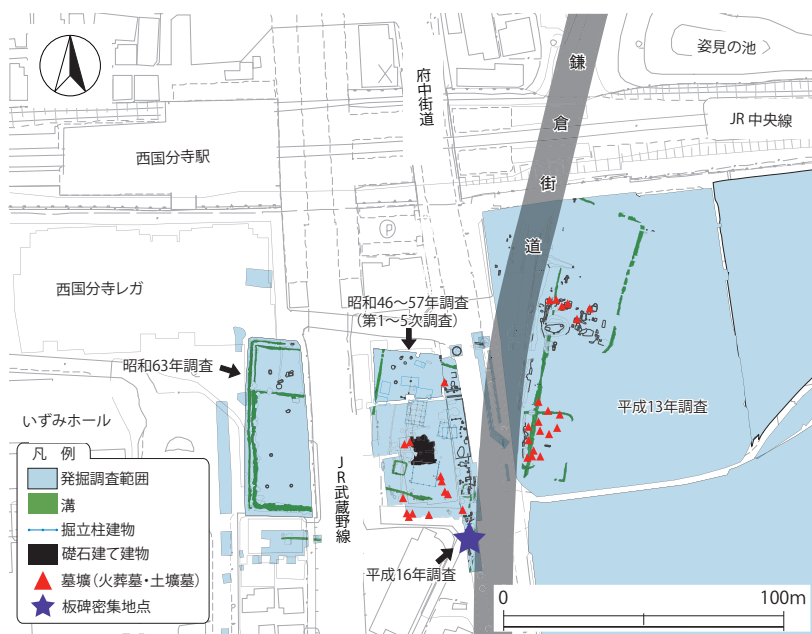
史跡指定を受けることになったが、その後、僧尼寺主要伽藍の範囲外にも幾つかの地点で礎石や古瓦が散布している状況が指摘された。その一つに石村喜英氏が「寺院国分寺の西北方約十町の国分寺字恋ヶ窪、阿弥陀坂西側の山中に若干みられる」という現在の西国分寺駅南側一帯に広がる雑木林があり（石村一九六〇）、武蔵野線と同駅の開業に向けて宅地開発の波が押し寄せたことから昭和四六く五七年に発掘調査が五回実施され、後に「恋ヶ窪廃寺跡」と命名される古代末々中世の寺院跡の存在が判明した。

遺跡は北側に恋ヶ窪谷を見下ろす標高約八十メートルの台地縁辺部に立地し（図一）、中央を南北方向に一本の道路跡が縦貫する。本道路跡は約一キロメートル南方で国分寺崖線を切通状に開削し、崖下は古代武蔵国分尼寺の中枢伽藍上に重畳して伸び、さらにその延長経路上で行った市内および府中市域の発掘調査では複数地点で幅約十メートルの硬質面と側溝が点々と見つかり、中世鎌倉街道上道の痕跡として捉えられている。対して北方は、近世恋ヶ窪村「ボンムラ」の中心を南北に突き抜け、東福寺の東側を走る現道は鎌倉街道を踏襲したものであ

る。なお、本遺跡と「ホンムラ」を繋ぐ区間は、明治二六年（一八九三）に開通した甲武鉄道線路軌道で大きく滅失しているが、当該範囲こそ『四神地名録』や『江戸名所図会』等で恋ヶ窪の名所として紹介された阿弥陀坂であり、中央線西国分寺駅上りホーム脇には現在もかうじて切通し状の景観を留めている。また、駅周辺の再開発事業に伴い平成十三年に行った発掘調査では阿弥陀坂の一部が箱堀状の道路跡として検出され、その後も恋ヶ窪廃寺跡の周辺一帯では平成十六年まで調査が続いている（図三）。このうち五次調査までの成果概要は有吉重蔵氏が市史上巻で触れ、発見された礎石建て建物一棟、掘立柱建物七棟、堀跡六条、墓壇（土壇墓・火葬墓）約四十基、方形周溝状遺構二基、その他多数の溝跡は、遺構の重複関係や主軸方位、出土遺物等から三時期の変遷過程があると扱っている（有吉一九八六）。要約すると、第一期（創建期）は礎石建て建物が該当し、その規模は東西九メートル、南北十、七メートル、高さ〇・三メートルの土壇上に建ち、礎石や根固め石を十箇所を確認した建物規模の詳細は不明ながら、出土した瓦は九世紀中頃～十世紀が主体を占めているという。第二期は鎌

倉街道に東面し、溝で区画した範囲の内側に複数の掘立柱建物群や方形周溝状遺構を配する再建寺院で、重複し合う遺構のうち主軸方位が揃うグループごとに新旧二時期に細分化でき、十三世紀末頃を中心に十一世紀中頃から十四世紀後半の年代を与えている。また、宗派は街道に東面する伽藍配置や恋ヶ窪村の鎮守熊野神社の存在から時宗系、もしくは方形周溝状遺構が禅宗の葬法に関連するものだとして禅宗系に想定した。そして第三期は区画溝が埋没し、第二期の建物は存続しつつ、土壇墓・火葬墓・火葬骨集中地点など墓壇を主体に板碑が造立された場へと変化し、十四世紀後半から十五世紀末の年代を充てている。

このうち第一期は武蔵国分寺と同範の軒先瓦を含むことから、礎石建て建物を『続日本紀』宝龜二年（七七二）十月己卯条に「……其東山駅路、従上野国新田駅、達下野足利駅、此便道也、而枉従上野国邑楽郡、経五箇駅、到武蔵国……」と記載された東山道武蔵路の五駅中の「某駅」に比定する説や（坂詰二〇〇七）、僧・尼の山林修行の場と考える説（有吉二〇一四）など、国分寺に関連する建物として評価される一方で、瓦の出土量自体が少



図三 恋ヶ窪廃寺跡と周辺の中世遺構群

なく、礎石の根固め用に国分寺瓦が運ばれてきた可能性もあるなど、礎石建て建物を瓦葺とみる見解そのものにも疑義があるという（有吉一九八六）。旧市史で触れられた遺跡の枢要部分にあたる三～五次の調査報告書は未完のため現時点で詳細は不明と言わざるを得ないが、遺跡の変遷も第一期と第二期で継続性をもつのか、あるいは断絶するのは大きな問題である。また、既刊の市史や発掘調査報告書で紹介された恋ヶ窪廃寺跡出土の板碑のうち紀年銘を伴うものは二二枚を数え、嘉暦三年（一二三二）から明応四年（一四九五）までの年号を有しているが、^{※七} 第二・三期ともに当該地は板碑造立の場であったことにもなり、三時期区分で捉える遺跡の評価自体も再検討の余地を残しているといえよう。さらに、発掘調査では十七～十九世紀の陶磁器類が出土しているものの、『四神地名録』に「云ひ伝えのみにて今はなし」とあるように、十八世紀末時点では既に寺院は存在していなかったと思われるが、十五世紀末以降も存続していたかは定かではない。しかし、阿弥陀坂の上にある恋ヶ窪廃寺跡は、国分寺村との境界に近く、恋ヶ窪村域側に含まれるという地理的な条件を考えれば、文献にみえる

「無量山道成寺」である蓋然性は充分にあるといえるであらう。^{※八}

四、近代以降の重忠伝承のさらなる脚色化

重忠が最期を迎えた横浜の二俣川地域で、今日に通底する重忠像の形成過程を検討した阿諏訪青美氏によると、中世に成立した『平家物語』や『源平盛衰記』等に記された「鴨越の逆落とし」や「宇治川の先陣争い」の活躍譚を母胎としながら、源平合戦五百年忌に東大寺大仏殿建立の勧進興行を兼ねて創作された近松門左衛門の『出世景清』（貞享二年（一六八五）成立）がイメージの定着に最も影響力を及ぼした作品であるといい、さらに近代以降には明治十三年（一八八〇）の教育令改正で「修身」が重要視されて教科書に重忠が登場すると、豪勇・忠義・清廉潔白や教養の深さを象徴する「武士の鑑」としての重忠像が確立した（阿諏訪二〇二二）。そして、近世以降に流布した様々な重忠に纏わる伝承は、北限は北海道から南限は鹿児島県にいたるまで、四国・中国地方以外の地域で約二百箇所分布し、なかでも埼玉県が六五、東京都が三一、神奈川県が四三箇所を数え、

畠山氏の所領地であった武蔵国と幕府の置かれた相模国に全体の七割が集中している傾向が認められている（村松二〇一二）。

こうした一連の過程のなかで、大正五年（一九一六）に府中町青年会が発行した『武蔵国府名蹟誌』の「善明寺（府中町）」（国寶）阿弥陀佛の由来」項に、重忠と恋仲にあった遊女の名前がはじめて登場してくる。

「抑も善明寺境内に安置しある鐵佛阿弥陀如来、御胎内秘佛の小像は鑄造年月詳ならずと雖も大正四年を去ること凡そ七百五十年餘の古佛なり、今其の由来を尋ぬるに、疇昔秩父莊司次郎畠山重忠當地附近の戀が窪に數々遊びし折しも或時夙妻太夫の美貌衆人に勝れたるを憎からず思ひそめけり、彼の夙妻太夫また此の殿君なつかしと思ひなづみて果ては日毎に相見んことの叶す果報のうれしさを人知れずこそ一人笑みつつありしに生者必滅會者定離は世のならはせとは云ひながら、戀ひしたふ殿君は義経平家追討の一味に加はり関東武士の腕前見すべき時こそ来れど関西の方に出で向はんと一度立ち上りしが、夙妻太夫のことを顧みては必残らざるにあらず、せめては暫時の別れぞと一言を遺さんにはとて事の始終を聞かせければ、夙妻太夫聞くより早くも泣き伏しにけり、重忠言葉を改めて曰く、御身のいとしさ我ならで知る人なけ

ん、然れども我こたひ出陣せん事如何に諦めて時節の来るを待ち玉へと云ひければ、夙妻太夫ふり落る涙をぬぐひつつ、つれなき殿君の仰せかな、せめてのこと御情に御供のほどお許し玉へぞかしとて、今は狂乱の如くすがり嘆くを重忠おし有めつつ、我等が武運を祈り玉へとて鎧の袖を振り拂ひ、後れて人の笑罵にされまじと早くも馬に鞭をぞあてにける、取りのこされし彼の夙妻太夫は長き日の春もいつしか過ぎさりて思ひつづくる長き夜も秋もいつしか暮れにけりされど我戀ひしとふ殿君の悲しき便り聞かんよりは、絶えて久しき雁かねのうれしくもまた憂ひけるうき川竹の仇枕、茲に仇なる男あり、御身が戀ひつる重忠殿も武運拙かりけん響の頃はかなき討死遂げ玉ひきと誠やかに物語りしければ夙妻太夫身も世もあらず悲み嘆き、早此の上は黄泉の國まで殿君の御後一足に御駈け縋り参らせんものとして果敢なくも自害し果てたりけり、さる程に重忠役を終へて武運目出度立ち歸りけるにあはれ夙妻太夫は既に亡し矧んや我迹慕ひてはと聞てはいよいよ懐しく思ひ、夙妻太夫が菩提を吊はんとて阿弥陀佛の鉄像一基を鑄させ、一宇の堂を建立して無量山道成寺と名づけたるもの御胎内の秘佛即ち是れなり。因みに記す、畠山重忠は重能の子幼名氏王丸武蔵國の人なり畠山莊に居り畠山莊司二郎と稱す、天性寛大嘗て義仲を討ち平家を攻め功あつて誇らず人皆其の徳に伏す、元久二年

(二二〇五)不幸にして纔に遇ひ北條時政に圖られて戦死の後には彼の無量山道成寺も星移り物變りて世はいつしか頽れ、地も漸く寂れ行きて果てたりしかば彼の御胎内の鐵佛のみ風寒き日も黒鐵鏝くる夏の日も雨凌ぐべき笠もなく叢の中に山田守る案山子の如くなりしを後人妙蓮菩薩鑄師藤原助近なる者と相計り重忠が志を空しうせんことを深く憂ひ大勸進して一丈二尺の大鐵佛を建長五年(二二五三)二月十八日鑄道し重忠が建立せし小像を御胎内に納め後の世までの語り草のみならず右志す者の過去二親行嚴新發意乃至法界衆生平等利益奉鑄一丈二尺佛身也建長五年癸丑二月十八日丙寅彼岸初日』然るに何時の頃なりしか今は年月不詳なれども今の大國魂神社々に運び尊敬浅からざりしも明治維新の際神佛混淆廢され悲願山善明寺に奉移し境内佛堂として安置せらるること茲に四十六七年蓋し顧ふに一盛一衰は事物の免れざるところ昔日はその名も尊ぶとき金佛尊も今や其の名も知らざる人の多きに達しつつある折柄大正二年四月國寶に編入せられ漸く又世に知らるるに至れり。(府中市教育委員会一九九四)。

※九

その後、昭和五年(一九三〇)に発行された高橋源一郎著の『武蔵野歴史地理』では、「恋ヶ窪と傾城夙妻太

夫物語」の小見出しまで登場し、今日にも語り継がれている地域説話の完成形をみるようになった。

おわりに

都内の中野区周辺を舞台に、文明九年（一四七七）に在地武士の豊島氏と扇谷上杉家の家宰太田道灌が交戦した江子田原沼袋合戦や、永享十年（一四三八）の多宝山成願寺の開創に纏わる中野長者伝説等を題材にして、史実が伝説化する過程を考古学・文献史学・民俗学の成果をもとに検証した比田井克仁氏は、史実が正確に伝承される約一二五〜一四〇年後の第一段階から、伝承された史実が忘却され、違ったモチーフが加わり内容が変容する第二段階を経て、その後、史実は内包されているもののストーリー性を持つように発達して伝説化する約三五〇年後以降の第三段階という三つのステップを経て、現在に伝わる各地の地域説話が完成していくとした（比田井二〇〇六）。

恋ヶ窪廃寺跡は、発掘調査に基づく考古学的事実として十三〜十五世紀末まで存続したことは確実で、『四神地名録』には廃寺として無量山道成寺が登場するまでの

約三百年間は、比田井氏のいう伝承された史実が忘却された時期にあたる。しかし、巻末（注八）にも記すように同じ寛政期の典籍『寛政年鏡』には、高安寺の「末門葉寺中頭首十箇寺」として「恋窪邑半天山無量院今有」と現れるなど、実存していた可能性もある。遺跡の実態と関連資料との突き合わせには検討が及ばなかった課題もあり、これから始まる新しい市史編さん事業でさらなる調査・研究の進展に期待したい。

恋ヶ窪の畠山重忠伝承は、強き男性ヒーローと、か弱き女性ヒロインを主軸に据えた物語で、前近代の価値観が色濃く、現代社会に生きる私たちには多少なりとも違和感を覚える構成に映るかもしれない。しかし、恋ヶ窪には六所宮の鉄仏に重忠伝承が付加される前からも「恋」に纏わる地域説話があり、そこに重忠や傾城・葉の松、夙妻太夫や横恋慕する別の男、姿見の池といった脚色化が順次進んでいった。恋ヶ窪と重忠との関係性は不明ながら、内容自体に史実が反映されていないことも、その伝承期間は優に数百年以上もの歳月におよんでいる。恋ヶ窪という地域の特性を考えると、説話そのものが貴重な歴史的遺産であることは紛れもない事実といえよう。

【謝辞】 本稿は、国分寺市教育委員会と東京経済大学が毎年共催にて実施している二〇二四年度第四二回市民大学講座「現代社会を考える二〇二四―地域と国際社会の変容―」（全八回）のうち、第六回「国分寺の畠山重忠伝承―恋ヶ窪の地名由来を考える―」（令和六年十一月十六日）の口頭発表資料をもとに文章化したものである。講座の開催にあたっては、同大学広報課、ならびに本市教育委員会社会教育課職員の御協力を得ました。末筆ではありますが、記して御礼を申し上げます。

【注】

- 一、『国分寺村古絵図』（国分寺所蔵絵図）は『市史中巻』二六一頁図四を参照。同絵図は年紀不詳ながら、延宝六年（一六七八）「屋敷御検地水帳」（『国分寺市史料集Ⅲ 三号文書』記載の名請人と絵図の屋敷地の配列が合致することから慶安（寛文初期）（一六四八～六五）の制作と推測されている（北原一九九〇）。
- 二、畠山重忠伝承は、ほかにも市史の左記の章節等で紹介されている（有吉一九八六）、（北原一九九〇）、（青木一九九〇）。
- 三、本覚山妙光院文書の翻刻資料は『史料集Ⅲ』に収載。『門末世代記』（二七二号文書）、『本覚列祖傳』（一七三号文書）。
- 四、現存鉄仏では最大規模の坐像で、像高は一・七メートル、重量は三八〇キログラムを測る。建長五年に念阿弥陀仏と明蓮が仏師の藤原助近へ依頼し、藤原姓の女性三人が彼岸初日に亡父母と行殿人々の供養を祈念し制作したことが左記の銘文から窺える。重忠が没した約五十年後に鑄造され、遊女の菩提を弔う目的で造立したという伝承内容は歴史的事実ではない（府中市二〇二〇）。

（衲衣左胸部）

大勧進念阿弥陀仏、明蓮、大工藤原助近、

右志者、為過去二親□行嚴新發意、乃至法界衆生平等利益、

奉鑄一丈二尺仏身也、

建長五年癸丑二月十六日丙寅彼岸初日

（衲衣左胸部）

藤原氏

藤原氏

藤原氏

五、『新編武蔵風土記稿』の国分寺村の小名黒鉄の項には「村の西に

あり、府中六所にある所の鉄像の弥陀は、昔此谷より掘出せしものなりといふ。此所の丘林を祥応寺跡と呼」と記載され、黒鉄を恋ヶ窪村の阿弥陀堂・無量山道成寺とは異なる鉄仏旧来地として紹介し、小野氏も国分寺村説を支持している。

なお、享保年間に開発された本多新田の菩提寺である祥応寺（黄壁寺）は山号を黒金山と称し、開発人の所持地にあった檀那不在の貧寺を新田へ引寺したことが享保十一年（一七二六）六月の「国分寺祥応寺開発場二引寺仕度願書」にあり、その故地は「伝祥応寺跡」という現在の武蔵国分尼寺北方の台地上に比定されている（松尾一九九〇、図一）。

「国分寺祥応寺開発場二引寺仕度願書」

年恐口上書を以奉願上候

一 武州多摩郡国分寺村二從古来禅宗之小寺、深川海福寺末祥応寺与申貧寺、無檀中二而及大破二拙者地内二草庵体二而差置候所、幸此度願場之内地面少々割渡し開發仕候、依之右祥応寺開

発場江江移取立相續仕度奉願上候、勿論然上ハ只今迄之国分寺
村祥応寺、寺号寺地之儀ハ潰候様ニ可仕候、御慈悲を以願之通
引寺仕、寺用相勤候様ニ被仰付候ハ、難有可奉存候、以上

武州多摩郡国分寺村願人

享保十一年午六月

名主 儀石衛門 ⑩

同新田村与頭 仲右衛門 ⑩

同村 泰洲 ⑩

岩手藤左衛門様 御役所

—『国分寺市史料集Ⅱ』十七号〔本多良雄家文書〕

当該地では昭和四〇年と旧版市史刊行後の平成七年に発掘調査が行われ、切通し状に開削した鎌倉街道の西側に面して、北西南の三方を土塁で囲繞する礎石建て建物を検出し、一堂形式の中世寺院であることが判明した。調査報告書によると、土塁内整地土から十三〜五世紀末の土器・陶磁器や板碑が、表土からは十八〜二〇世紀の陶磁器類が出土し、「十六、七世紀のものが無く、「祥応寺」が十八世紀初頭には「大破」して無檀であった状況と合致する」と記されているが（福田一九九七）、板碑の造立を伴う建物跡が十五世紀末まで存続したことは確実である一方で、十七世紀の遺物が無いという事実は、すなわち当該地には享保年間当時、祥応寺と称する貧寺は存在していなかった可能性もあるといえるであろう。

その際、田中洋平氏が上野国高崎藩の地方役人大石久敬が記す『地方凡例録』に、近世寺院は創建時期によって「古跡」と「古跡並」に分類され、元禄以降、これら以外の新規寺院は建立が差し止められたことを示しつつ、元文五年（一七四〇）時点で正式な寺号を保

持していなかった常陸国真壁郡藤ヶ谷村の正行院が、「当村白水海跡、前々より御当山支配にて、古跡ニ紛れ御座なく候」（『関城町史料編一』「藤ヶ谷正行院願」）として願い出ることによって正式に寺号を得た経緯を紹介していることは、享保期の新田村における檀那寺の建立事情を考えるうえで、非常に示唆的である（田中二〇二五）。

それは、武蔵野新田の引寺事例を検討した小峰孝男氏も指摘するように、元禄五年（一六九二）の新寺建立の禁令発布後は幕府による寺院建立が厳しく統制されるなか、古跡・古跡並の寺院で潰れもしくは廃寺となったものの再興に関しては許可される場合があり（小峰二〇〇四）、たとえ有名無実であっても、再興した体裁を幕府に認許されれば引寺が成立することを意味しているからである。

また近年、前述の延宝六年国分寺村検地帳に記載のある小名「堀之内」が、明治二年（一八六九）の国分寺村絵図と照合すると、「伝祥応寺跡」付近に該当することが改めて判明した（依田二〇一八）。周知のとおり、「堀之内」は中世武士の居館跡に伝わる地名であり、「伝祥応寺跡」と伝承される遺跡の性格自体も今後検討を要する課題といえる。

六、このほか青木直己氏は、恋ヶ窪村の畠山重忠伝承、六所宮の阿弥陀仏、傾城松・葉松、道成寺、古墓の板碑に触れた近世地誌類に、『遊歴雜記』（文化十二年・釈木清著）、『武蔵野略遊記』（文政二年）、『四神社閑記』（文政七年・池田定常著）、『郊遊漫録』（斎藤幸孝著）、『武蔵演路』（屋代弘賢著）などを紹介している（青木一九九〇）。

七、嘉暦三年・明応四年銘の板碑は、ともに（滝口一九七二）文獻で属性情報を記した一覽表のみ掲載されているもので、前者は本多章吉氏所蔵資料、後者は昭和四十六年の恋ヶ窪廃寺跡第一次調査出

十資料であるが、今後の調査で資料の採拓・写真撮影が必要である。

八、阿弥陀堂と道成寺との関係については、明治三年「阿弥陀堂杉売松帳」（『史料集Ⅲ』一七〇号文書）に「元わ、半天山無量院蔵清寺申成、今ハあみたどつ申成」とあり、『調布日記』や『江戸名所図絵』からも道成寺境内に阿弥陀堂が含まれていた可能性がある。また、府中高安寺に伝わる典籍で、天正七年（一五七九）の『報恩録』には「当寺十利頭首市川山見性寺」の西之五院・東之五院に加えて、近門中に「恋窪無量院」を含む六箇寺を記しているほか、寛政八年（一七九六）の『寛政年鑑』にも高安寺の「末門葉寺中頭首十箇寺」として、恋窪邑半天山無量院と記載されている（『禅宗地方史調査会年報第二集』一九八〇年）。また『新編武蔵風土記稿』に「彌陀堂三間四面、村の南境にあり、府中高安寺持、木の坐像長二尺許、此堂昔は無量山道成寺とも云、或は飯寺とも云へるよし、いづれ寺の摩跡なるべし」とあるように、かつて道成寺（蔵清寺）は高安寺とは本末関係を持していた。北原進氏によると文政五年（一八二二）の底裏銘のある東福寺の位牌に、「恋窪邑阿弥陀堂は往古人王九十七代光明院御宇、足利尊氏公章創高安寺時、末山八十五箇寺建成、其十首の一而号半天山無量院、其後転派以高安四世為開山事跡歴然也、依人仏の日記焉、龍門山二十世天山事」とあることから、道成寺は文政四年頃に高安寺の末門から転じて、東福寺の管理下に移ったことを推測している（北原一九九〇）。

なお、明治六年（一八七三）『数目調書』（『史料集Ⅰ』三四号文書）は「旧跡傾城ノ松」の由緒に触れ、元弘三年（一二三三）の分梅河原合戦において「此夜の悪害に、相州勢国分寺をはじめ、当地の道城寺を焼たるよし、此時恋ヶ窪の町屋も類焼し」たことを伝える。

九、この時、鉄造阿弥陀如来坐像の造年銘と重忠の生存年と不整合であることを解消するため、同じ善明寺に伝わる像高一メートルの鉄造阿弥陀如来立像を坐像の胎内仏であると称し、立像に重忠伝承を付加している。そして、坐像の附として重要文化財に指定されている（小野二〇一一）。

【参考文献】

青木直己 一九九〇 「第十一章 農村の文化 第四節 国分寺を訪れた人々」『国分寺市史 中巻』国分寺市（八四五～八六一頁）

阿諏訪青美 二〇二二 「横浜・二俣川地域にみる畠山重忠イメージの創生」『横浜市歴史博物館編『書物学』二〇 追憶のサムライ中世武士のイメージとリアル』勉誠出版

有古重蔵 一九八六 「第五章 中世における国分寺市域 第五節 国分寺市域における中世遺跡」『国分寺市史 上巻』国分寺市（七四九～七七七頁）

有古重蔵 二〇一四 「国分寺と都市計画」『季刊考古学 第二一九号 特集王権擁護の寺・国分寺』雄山閣

石村喜英 一九六〇 「第三章 遺跡の研究 一、遺跡の概況」『武蔵国分寺の研究』明善堂（八九～九〇頁）

小野一之 二〇一一 「鉄仏の来歴と畠山重忠の伝説」『府中市郷土の森博物館紀要』第二四号

北原 進 一九九〇 「第三章 村と本百姓 第二節 村々の景観」『国分寺市史 中巻』国分寺市（二八一～二八九頁）

菊池山哉 一九六四 『府中市史料集』三 府中市史編纂委員会

菊池 功 二〇一四 『東京の地名地形と語源をたずねて』河出書房

新社

- 国分寺市教育委員会 一九八一 『国分寺市史料集Ⅰ 村落状況・支配関係文書』
- 国分寺市教育委員会 一九八二 『国分寺市史料集Ⅱ 武蔵野新田開発関係文書・川崎平右衛門関係文書』
- 国分寺市教育委員会 一九八三 『国分寺市史料集Ⅲ 寺社・信仰・文芸関係文書』
- 小峰孝男 二〇〇二 「享保期武蔵野新田における離檀と引寺」『東村山市史研究』第二号 東京都東村山市
- 坂詰秀一 二〇〇七 『万葉集』と東山道武蔵路』『立正大学人文科学研究所年報』別冊一六（後、二〇一六『考古渉獵抄（私の考古遍歴三）』ニュー・サイエンス社に再録）
- 柴辻俊六 一九八六 「第五章 中世における国分寺市域第一節 鎌倉幕府の成立と武蔵」『国分寺市史上巻』国分寺市（六二六～六七頁）
- 清水 亮 二〇一八 『中世武士 畠山重忠 秩父平氏の嫡流』歴史文化ライブラリー四七七 吉川弘文館
- 関口雄基臣 一九七五 「国分寺」松岡六郎・吉田格編『多摩の歴史 3 国分寺市・国立市・小平市・武蔵村山市』武蔵野郷土史刊行会（後、氏子青年部発行『恋ヶ窪の歴史』に収載）
- 滝口 宏 一九七二 『恋ヶ窪堂址調査報告』泉町廃寺址遺跡調査会
- 高橋源一郎 一九三〇 『武蔵野歴史地理』第三冊（一九七二年に有峰書店より再刊）
- 田中洋平 二〇二五 『住職たちの経営戦略 近世寺院の苦しい財布事情』歴史文化ライブラリー一六四 吉川弘文館
- 比田井克仁 二〇〇六 『伝説と史実のはざま―郷土史と考古学―』

雄山閣

- 藤森裕治・田中 斉・大嶋一人 一九九五 「信仰」『国分寺市の民俗 五―本多新田・恋ヶ窪村の民俗』国分寺市教育委員会
- 府中市 二〇二〇 『新府中市史中世資料編』
- 府中市教育委員会 一九九四 『武蔵国府名蹟誌』府中市郷土資料集 十六
- 福田信夫 一九九七 『武蔵国分尼寺跡Ⅳ―平成七年度発掘調査概報』国分寺市教育委員会
- 松尾公就 一九九〇 「第二章 享保改革と武蔵野新田の開発 第二節 武蔵野の開発」『国分寺市史中巻』国分寺市（七二丁～八三頁）
- 村松 篤 二〇二二 「全国に及ぶ重忠伝承」埼玉県立嵐山史跡の博物館・葛飾区郷土と天文の博物館編『秩父平氏の盛衰 畠山重忠と葛西清重』勉誠出版
- 吉田東伍 一九〇七 『大日本地名辞書 第六巻 坂東』富山房
- 依田亮一 二〇一八 「武蔵国分寺跡第七一八・七二三次調査」『平成二八年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会

よだ りょういち

ふるさと文化財課長
兼市史編さん室長